

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

二上山の東麓、雌岳南側の岩屋峠を越えて大阪に通じる岩屋道沿いに、柱一本で建つ斎型の建造物がある。

屋根は宝形造り本瓦葺き、小規模ながらも重厚さと安定感を感じさせる。軒丸瓦には「本」の字が刻まれている。中央の礎石に42枚角の檼の柱を差し込み、対角に梁を通して四方に桁を組み、屋根を支えている。真柱東面の上部には観音開きの小窓があり、供物棚も設けられている。今は別途保存されている小型の梵鐘が北側に釣り下げられていた。

幕末の嘉永6年（1853）に刊行された『西国三十三所名所図会』には「此小堂は前の領主本田侯の菩提の為に恩顧の田、領地の農民等相談して建る所なり」とある。毎年8月1日に、今在家

で仏事を営んでいたことも記され、釣鐘願主の家臣として吉弘統家の名が挙げられている。

「領主本田侯」とは、

十九万石の領主として、寛永16年（1639）に大和郡山に入部した本多政勝のことである。本多家

は三河以来徳川家康に付き従い、数々の武功により徳川政権確立の一翼を担い、大名に取り立てられていて。その本多家を、嫡子死去により急遽引継いだのが政勝だった。

一方、吉弘統家は九州において霸を唱えた大友氏を支える大友田原氏の末裔で、同氏は関ヶ原の戦いの豊後版とされる石垣原の合戦に破れ、本家とともに滅亡している。争乱の世が終焉し、各地



練供養の日の傘堂（県指定有形民俗文化財、解体修理前）＝筆者提供

人々の思い伝える傘堂

れた時に、明暗を分けた二つの氏族の末裔同士が、何らかの縁で出会い、統家に任用の道が開け、終生忘れ得ない藩主への恩顧の意識となつたのだろう。本多氏の本貫地も

軽組頭であったが、後に軽組頭であったが、後には郡奉行として、民政の担い手として傘堂そばの大池の築造にも関わった。寛文11年（1671）

釣鐘には「恋王の私情にたえず」「一恩報恩」など統家の藩主恩永伝など統家の藩主への強い恩顧の意識が刻み付けられている。この鐘は五位堂（現香芝市）で作られたが、統家の妻

や一族、家婢まで自分の銅鏡を「喜捨助縁」したことも分かっている。傍らの大池は、この吉弘氏等が行基の先蹟に習って開いた池で、その恩恵を被った付近の今在家・染野・新在家の人は、感謝して現在でも毎年九月に施餓鬼を行っている。

た。されたのがこの傘堂だった。釣鐘には「恋王の私情にたえず」「一恩報恩」など統家の藩主恩永伝など統家の藩主への強い恩顧の意識が刻み付けられている。この鐘は五位堂（現香芝市）で作られたが、統家の妻